

研究ノート

## 地方公務員と長野パラリンピック —鈴木隆夫氏インタビューより—

富田 幸 祐 (オリンピックスポーツ文化研究所)  
齋藤 雅 英 (スポーツ文化学部／教育福祉系)  
津田 博 子 (体育学部／身体教育系)

### はじめに

本稿は、1998年3月5日から3月14日にかけて開催された長野パラリンピックにおいて長野パラリンピック組織委員会（以下、NAPOC）に所属していた鈴木隆夫氏に対するインタビューを基に構成されている。鈴木隆夫氏（現、山ノ内町健康福祉課課長）は長野県山ノ内町からNAPOCに派遣され、主に式典担当として長野パラリンピックの運営、準備に従事した。

なおインタビューは「研究プロジェクト3：オリンピックと芸術文化」の一環として、2019年1月6日（月）に山ノ内町役場にて実施したものである。

### 1. 長野パラリンピックの事業：組織・担当部署について

鈴木氏が長野パラリンピックと関係を持つようになったきっかけは、鈴木氏が勤務する山ノ内町が、長野オリンピックの競技会場であったため、競技会場から派遣要請されたことに端を発する。鈴木氏によれば1993年のことであったという。

最初に配属されたのは総務課っていうところですよ。組織委員会っていか準備委員会だったかな、立ち上げまでの間は全部で10名だったんですよ。山ノ内町から1人、長野県の白馬村っていう所から1人と、なぜか野沢温泉はいなかった

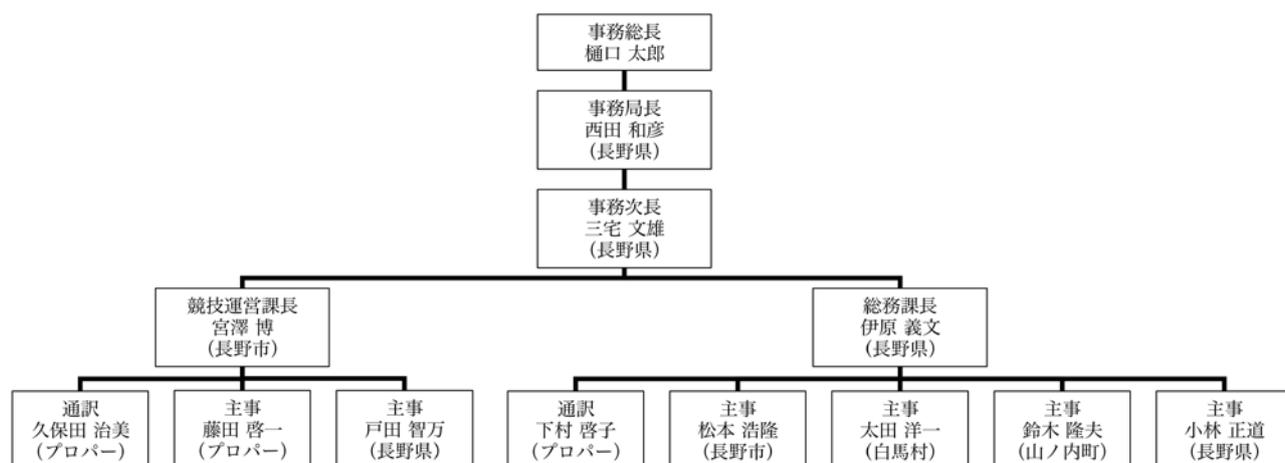


図1. 設立当初の事務局組織図

財団法人長野パラリンピック冬季競技大会組織委員会『長野パラリンピック冬季競技大会公式報告書』1998年，p. 330を基に筆者作成。

んですけど、あと長野市から2人かな、プロパーが2人、あとは長野県です。長野県からは、だから何人だ。4人か。そんな10名でやってたっていうのが始まりですね。

組織委員会が本格的に始動すると組織委員会のメンバーは複数の部署にわかれることになった。そして鈴木氏は大会運営係、開閉会式を含めた式典を担当することとなった。なお、『長野パラリンピック冬季競技大会公式報告書』（以下、『大会報告書』）によれば大会直前に式典担当は、式典推進室として独立している。

鈴木氏によると、当初聖火リレーと表彰式を含めた開閉会式の担当には鈴木氏を含めて4名が割り当てられた。鈴木氏は本来、競技会場がある自治体からの派遣であり、また鈴木氏自身もアルペン競技の運営を行った経験があったため、アルペンの競技を担当する予定であったが、鈴木氏本人の希望により開閉会式の担当となったという。とはいえ鈴木氏自身も当初はパラリンピックというもののイメージが掴めていなかったという。

本当に、平成5年 [1993年一筆者注] に行ったときは、俺ですら知らなかったですよ。え、オ

リンピックだろうって。パラリンピック派遣って言われて、「え、オリンピックでしょう？ 何？ そのパラリンピックって」っていうぐらいでしたもん。そんなのね、本当に全員でしたよ。パラリンピック知ってる人のほうが珍しいくらい。

鈴木氏の仕事で、まず重要な役割は総合プロデューサー選びなどを含めた大会の準備であった。当時、パラリンピックの知名度は低く、まずパラリンピック自体を知ってもらうことに全力を注いだ。パラリンピックの知名度を上げるために県内のイベントに出向き、パラリンピックのグッズを販売するといった活動を通してパラリンピックを知ってもらうことから始まった。1日の売り上げが1万円にも満たない日々が続いたという。

また本大会の1年前に開催したプレパラリンピックでは、表彰式のための国旗の手配等準備を行った。

## 2. プロデューサーの選出と式典計画の変更

パラリンピックの開会式と閉会式の両式典には総合プロデューサーとして久石譲氏が選ばれた。

推進会議事務局	組織委員会 (任意団体)		組織委員会 (財団法人)					
	1993年4月1日	1993年11月16日	1994年12月8日	1995年4月1日	1996年4月1日	1997年4月1日	1997年11月1日	1998年4月1日
	事務総長	事務総長	事務総長	事務総長	事務総長	事務総長	事務総長	事務総長
事務局長	事務局長	事務局長	事務局長	事務局長	事務局長	事務局長	事務局長	
	事務次長	事務次長	事務次長	事務次長	事務次長	事務次長	事務次長	事務次長
総務課	総務課	総務課	総務課 総務係 調整係 広報・渉外係	総務課 総務係 調整係 広報・渉外係	総務課 総務係 調整係 渉外係 広報係	総務課 総務係 調整係 渉外係 広報係	総務課 総務係 調整係 渉外係 広報係	総務課
競技運営課	競技運営課	競技運営課	競技施設課 競技施設係	競技施設課 競技施設係	競技施設課 競技施設係	競技施設課 競技施設係	競技施設課 競技施設係	管理課
			大会運営課 大会施設運営係 大会運営係 大会サポート係	大会運営課 大会施設運営係 大会運営係 大会サポート係	大会運営課 大会運営係 大会サポート係 ボランティア係	大会運営課 大会運営係 大会サポート係 ボランティア係	大会運営課 大会運営係 大会サポート係 ボランティア係	
							式典推進室	

図2. 事務局組織の変遷図

財団法人長野パラリンピック冬季競技大会組織委員会『長野パラリンピック冬季競技大会公式報告書』1998年, p. 329を基に筆者作成。

久石氏が総合プロデューサーに決まったのは大会開催の3年前であった。

『大会報告書』によれば、1995年12月13日に開催された第3回式典専門委員会において、大会の「開催理念」「大会テーマ」「大会スローガン」を踏まえた式典全体の総合プロデューサー選定が行われ、久石氏が選出された。選出理由として①長野県中野市出身で長野をよく知り、「長野県の文化を愛し、理解し、それを消化して、効果的にアピールすることができる」こと、②「音楽家としての独創かつ斬新的な活動が高い評価を得ており、ネームバリューがある」こと、③プロデューサーとしての地位を確立しており、企画演出デザイン等の分野の知識、また人脈が豊富であること、④長野パラリンピックのテーマソングをすでに依頼済みであり、テーマソングを含めた全体イメージをつくることのできること、⑤「常に前向きにチャレンジすることをライフスタイルとしている」ことの5つが専門委員会では挙げられている<sup>1)</sup>。

鈴木氏によると当初、委員会に広告代理店の関係者が入っていたため、他の候補者（蜷川幸雄氏等）の名前が挙がっていたが、選考過程でジブリ作品の作曲を手掛けている久石譲氏が長野県出身であることから話が進展し、交渉の結果、承諾が得られたという経緯を記憶しているとのことであった。組織委員会の中ではパラリンピックの知名度が低いとの認識があったため、久石氏にパラリンピックを知ってもらった上で演出・企画の構想を任せる方針であった<sup>2)</sup>。総合プロデューサーを久石氏に依頼した時点で開会式・閉会式の具体的な演出や構想案が先にあったわけではなかったということである。久石氏との打合せは月に1度ほどの頻度で東京にある久石氏の事務所で行われたという。『大会報告書』にも、式典計画については「総合プロデューサーの日ごろの活動で築かれた信頼関係を重視」し久石の所属事務所に「東京制作室」が設置され実務面を掌ることとなったと記録されている<sup>3)</sup>。久石氏への一任を象徴するかのよう

式典に関する委員会はその後1回しか開かれていない<sup>4)</sup>。

総合プロデューサーはご存じのとおり、久石譲さんなんですけどね、かなり芸術的に飛び抜けたというか、突出した方で、かなりいろんな構想をバンッ、と浮かんでくるというか、うちらはその下でいかにこう人集めして、いかに実現化させるために動いてたんですけど、どちらかっていうと、久石譲さんが描くのは開会式のイメージで、とにかくバーッとあふれるようになってくるんですよ。

久石氏との打ち合わせでNAPOCは「長野県」という存在を、とにかく広めたいと提案したという。すると久石氏は、長野県の伝統的で特徴的な祭りを採用する開会式案を提出し、その方向で計画は進むことになったという。

1996年1月15日と16日の2日間、久石氏は演出構想を練るために長野市の競技会場や野沢温泉の道祖神祭り（火祭り）の視察を行っている。16日には会見を開き、火祭りを開会式に取り入れたいと構想の一端を明らかにする。そして火祭りについて「構造的にダイナミックなだけでなく、人々が受け継ぎながら文化を築きあげている点に感動した…開会式はだれもが人間をいとおしく思う雰囲気をつくりだしたい。火祭りは絶好の素材」と『信濃毎日新聞』は報じる<sup>5)</sup>。このように、久石氏は長野県の祭りを使った式典構想を実現すべく動き出していたのである。

ところが、その後オリンピックでも「祭り」を取り上げる方向に動きだすこととなり、多くの祭りがパラリンピックではなくオリンピックで採用されることとなった。こうしてパラリンピックの式典は計画の修正を余儀なくされたという。

それでやってるうちに、よせばいいんだけどオリンピックが出てきてしまって、オリンピックの組織委員会が軒並みそういうお祭り取ってっ

ちゃったんですよ（中略）オリンピックが出てきて、長野県の際立ったお祭りをばあっとこう何ていうか、一斉にこっちより、こちらよりも人数も多いから、どわあっとみたいな。行く先々でオリンピック、オリンピックみたいになっちゃって。

そんな状況を伝えただけでも、「取りあえずやってみてくれ」って言うんで、御代田町の龍神まつりっていう所へ行っただけですよ。そこだけまだ話聞いてなかったんで、そしたら出てくれると、ぜひ協力させてくれるという話になって。本来うちの交渉とすれば、開会式に出てもらうために交渉してたんですけど、それがオリンピックではあつと取られちゃったんで。そこ、プレゼンテーション方針転換したんでしょうね。それで違うこと考えたんで、お願いした龍神まつりっていうのだけがポツンと残っちゃったんですよ。オリンピックが取るかなと思ったら、こちらの龍神まつりの人たちも、パラリンピックに頼まれたんだから断ってくれたんじゃないかと思うんですけど。ポツンとそれだけが残っちゃったんで、何かというと、閉会式で使ってもらっちゃってっていうのは龍神まつりのかたがたに悪いんだけど、そんなような流れになっちゃったんですね。

それで開会式は、本当にプロの神田うのさんとか、そういう人たちの少女にまつわる物語みたいな感じになっちゃって。それでみんなでカオスみたいな所から救い出して、みんなで良かったねみたいな感じの台本を書き上げてくれたんですよ。それで、閉会式はどうするんだみたいな話もあったんだけど、うちに伝わってこなかったから、題材としては龍神まつりっていう題材があります。ぜひこれを生かしてくださいみたいな感じでお願ひして。

長野県というものをアピールしたかったんで、特にパラリンピックはオリンピックとは違うんで。当初はね、もっと泥臭くっていうんですかね、泥臭くアピールしていきたいなって思ってたんで、そこに真っ先に応えてくれたのが龍神まつり

なんで、それを開会式に使えなくなっちゃったからって諦めてもらうんじゃなくて、野村さんの機転で、そこに演出に加えていただいたことは、当初の発想を、そのようなことで、泥臭くアピールしたかったっていうのも相まって、非常に良かったなっていうか、うれしく思いますよ。それは本当に、それは感謝しています。ありがたかったですね、演出に加えていただいて。じゃなければ、もう町挙げてよしーなんていう感じでやっていたのに、はい要りませんじゃあ、もう、ちょっと。何やってるんだみたいな感じになっちゃったんで。それは本当に、そこんところに関しては非常にありがたいし、うれしかったですね。

修正となった開会式は、アジア初であり、20世紀最後の冬季パラリンピックであることから「Hope（希望）」がテーマとされ、その計画は第一部の式典と第二部の祭典を通して「火」を用いた演出となった。聖火の入場と点火に始まり、第二部では火祭りをモチーフとして「火」をめぐる幻想音楽劇が展開されることとなった<sup>6)</sup>。一方で、閉会式のテーマは「Hope and Legacy（希望と遺産）」である。「長野パラリンピック=Hope」が残した遺産を受け継ぐことを確認する場という意味が込められた。大田楽を核として、閉会式の開始から終わりまでを区切ることなく、一つの祭りとして進められることとなった<sup>7)</sup>。

### 3. 式典の準備

式典計画の変更を強いられることとなったが、久石氏を中心に式典の準備が進められていく。久石氏は開会式に主眼をおいて計画を進めていたようで、会議では開会式の準備に多大な時間をかけられていたという。この会議には、大道具会社、制作会社も参加していたため鈴木氏も「結構頭にインプットしているんですよ。厚くはなかったけど台本もあったので、ここでこの人出てくるなどか…」と述べることから、ある程度演出内容を

理解していたという。しかし閉会式については「ほとんど直近まで出てこなくて（中略）1年前ですら、それで、さすがにうちらも焦っちゃって」というような状況であったという。

閉会式だけは、今言われるとおり全然進まなくて、困っちゃって聞いてみたら、野村万之丞さんってお方の名前が出てきたんですよ。プレパラリンピックが終わったくらいかなあ、分かんないな。ちょっとその辺の時間的なことは思い出せないんですけど、最初から構想があったのかもしれない。野村万之丞さんっていうのが、だからずっと言わなかったのかもしれませんが。（中略）その人に任せておけば結構こう、ネットワークも広いからかなり大丈夫だというふうなことを聞いて、ああ、そうですか。そういうお考えがあるんですでしたら、それはそれでいいんですみたいな感じで、どちらかという、開会式のことを主眼にずっと進めてきたみたいな感じなんですよね。多分、そんな流れだったと思うんで、構想はあったんだと思うんですよ、当初から。（中略）もう決めていただいたときから構想はあったと思うんですけど、なかなかこちに伝えてもらえなくて、野村万之丞さんって名前だけは聞いてたような気がするんですけど、その人が何をするのか、どんなことを考えてるのかって分かんなくて。

本当これも2カ月ぐらい前かなあ。閉会式っていうか、大会始まる2カ月ぐらい前に、あの当時ね、『百万本のバラ』っていう森山良子さんの曲がはやってたんですよ。なんかそれにまつわる何かを、オリンピックでやったんじゃないかと思うんですけどね。

取られたというのがあったから、知らないんですけど、じゃあ100万羽の鶴だと、もう折り鶴だと、日本的じゃないかと、鶴を集めようみたいなことを野村万之丞さんたちグループが考え出してくれたんですよ。それで2カ月ぐらい、本当に準備期間がなかったんですよ。2カ月ぐらい前に、

100万羽の鶴みたいな。千羽鶴っていうんだから100万羽にするのにいくつなんですかね。そのくらい集めれば、100万羽。一つ送ってもらえば1000羽なんだからまあ、なるかなっていうもろみで、そうはいつでも、10万羽くらいかなあなんて話してたんだけど、ふたを開けてみれば、500万羽ぐらい集まっちゃって、飾りきれないくらい集まっちゃったんですよ。もう本当に、多分、全国各地から来たと思いますよね。野村万之丞さんグループがそうやってやってくれて、100万羽の折り鶴に対抗してやるのと、龍神まつりをキーワードにした式典にしていくみたいな感じには、本当に、鶴集め出したのが大体2カ月くらい前ですから。もうそのぐらいになってもフワフワしてたんですよ、演出自体がね。だからもう、そんな感じで携わってたので、実際に閉会式ってことだけ考えて行動したっていうのは、どこからやったかっていうのは別に、そんな感じで動いてきたんですよ。ただ、その間に総合プロデューサーなり野村万之丞さんたちグループが、いろいろ構想を練ってたんだと思うんですけど、組織委員会のうちらにはほとんど伝わってこなかったですよ、何を考えてるのか。

このように閉会式は野村万之丞氏に一任された形となっていたようである。

#### 4. 裏方としての姿

開閉会式当日の鈴木氏の役割は、裏方として式典を滞りなく進めることであった。

裏方で、見てる余裕なんか一切なかった。そうはいってもうちら組織委員会のものが裏方っていうのはおこがましいんですけど、表舞台には出ない、本当の裏方さんっているわけで、演出の裏方さんとか、照明の裏方さんとか、報道の裏方さんとか、要するにその会場にはいない裏方さん。要するにそういう人の対応ですよ。だから、何して

たってわけじゃないんですけど、そういう方がちょこちょこ相談に来られるんですよ。だから、そこ動けなかったみたいな。本当はほげっと観ていたかったっていうのはあるんですけど、そういう人たちも、ざあっと生まれればやっぱり来ます。そんなことをしていただけてです。だから何してたかはちょっと思い出せないですけど、とにかく余裕なかったです。バタバタってして

鈴木氏は、閉会式会場であるエムウエーブで行われた競技会場の企画・演出も1人で行っていたという(パラリンピックのスケート競技、ホッケーも担当)。開会式が終わってもその余韻に浸る間もなく、次の競技のことで日々精一杯の毎日を過ごしていた。競技の演出をしながら、閉会式の準備もする毎日でほとんど眠れない、不眠不休な感じが続いた。そして閉会式後は、折鶴に関するクレーム処理に追われていたという。

その10何日間ほどは、エムウエーブ。氷が張るスケート場です。夜になると暖房が切れる。ここで泊まらなくちゃいけない苦痛なんてないですよ。中に氷がある、そこで寝る。でも、気が張って眠れないのもあるけど、いれちゃうんですよ、風邪もひかずに。気が張ってるから。徹夜を4日か、風呂は当然入らなかった。ご飯はいつも、ちょっと温かいものが来ますが、お昼は当然食べられず。朝、なんか軽いパンみたいな食べて。ずっと食べられずにお昼を、夕方食べてました。そこからまた準備が始まるという、1日2食で、徹夜して風呂も入らずみたいな生活だった。もうちょっとオリンピックみたいに、人がいっぱいいたら、もうちょっとできたんですけど。開会式の時も、車いすの方、寒い所にいさせてしまって、ちょっと体調崩させちゃうのも心残りだし、いろいろ心残りはありますね。一番心残り、ありがとうって、こうやってできなかったのが心残りですね。手伝いに来てくれた人たちいるんですよ、俺一人じゃ当然できないから。運営のボランティ

アみたいな。支援員みたいな。

「本番も、本当に裏方でバタバタして、式典はほとんど見てないんです」と語った鈴木氏であるが、「国旗だけは粗末にしちゃうと当然国際問題になっちゃうから」と入場行進は見ていたというが、閉会式ではそのまま途切れることなく式典が進んでいく様を次のように語っている。

白装束か、頭も白いような装束で、田楽を踊りながら入って来た。選手の人たちもばらっと入ってきた。最初に国旗だけは、ざんっと入れて、後はもう、選手は入り乱れてずうっと入って来た、その後とか先とかに、田楽の人たちが踊りながら入ってきた、それは勇壮な感じでしたよ。その選手が入り終わって座ったときに、龍神、要するに4.5メートルだったかな。龍が、ガアっと入ってきたんで。それも装束は万之丞さんのグループの方と同じような装束で、舞台を作ってあって結構スピードでばっと置いて。持ってた人たちが一斉に座ったんですよ。あぐらかいて、ばんって座ってシーンとなったときは、もう格好良かったですよ。あれをきくと、悪いなんて言う人はいないと思いますね。あれを大田楽っていうのかどうかは知らないですけど、その感じは田楽と思われる演出をされてましたよ。大田楽は格好良かったですよ。そういう評判しか聞かなかったですよ。

長野の龍神まつりに始まり、大田楽っていう日本の収穫であるとか、神を敬う文化があり、それで折鶴に日本人の願いが込められた。そういう意味では日本色を出せた閉会式だった。特に日本人の折鶴に対する気持ちはすごいものを感じる。特に閉会式は日本の方々に協力してもらったみたいなね、そんな感じはありますよね

長野パラリンピックが終わると、鈴木氏は4月1日には山ノ内町に戻らなければならなかった為、慌ただしく片付け作業に追われたという。

余談ではあるが、100万羽の折り鶴の処理には困ったが、『鶴の引き取りの希望のある方はお持ちください』とお知らせをしたところ、大勢の方に協力を得、ほとんど持って行っていただいた。3月14日に閉会式が終わった直後から、後片付けの対応をエムウエーブで3月31日まで行っていた。これが最終的な閉会式の思い出になった。

## おわりに

パラリンピックの存在自体が国民に浸透していなかったこの時期、総合プロデューサーにもパラリンピックの意義や目的を理解した上での演出方法が求められていたことや、その準備においては、オリンピックとの意図せざる競合があったことなど、貴重な証言を得たといえる<sup>8)</sup>。鈴木氏は、インタビューの中で長野パラリンピックを振り返りつつ、現在の心境をこう語った。

大会が終わったとき、障害者スポーツも含めて、認められたんだなと思いましたね。今だから、平気で東京オリンピックだって、オリンピック・パラリンピックって言うじゃないですか。昔は言われてないんですから。長野オリンピックで終わってたんですよ。長野オリンピックまであと何日なんて。その後パラリンピックやりますなんてことは、ひと言も言われてなかったんですよ。大会2年ぐらいまでは、長野オリンピックまであと何日、みんなで盛り上げていきましょうなんて言われるけど。グッズ販売行っても、オリンピックのコーナーは飛ぶように売れるんだけど、パラリンピックのグッズ持ってたって、見向きもされてませんでしたね。でも、障害者の大会なのっていう興

味示してくれた人が、たまに買いに来た。1日売ってたって売り上げ1万円いかないことなんかしょっちゅうでしたよ。それが言われるとおおり、長野パラリンピックやってから、障害者スポーツも含めてね、かなり認知度が上がったことに関しては、間違いないと私は思ってます。

## 注

- 1) 財団法人長野パラリンピック冬季競技大会組織委員会『長野パラリンピック冬季競技大会公式報告書』1998年、p. 138.
- 2) なお久石は、長野パラの基本理念として「だれもが地球の一員、ということ表現できないか。選手もボランティアも観客も、だれもが星座を形づくる星のように輝く大会。スターズ（星たち）がキーワードだろうか」と、就任時点での総合プロデューサーとしての構想を語っている「『星たち』がキーワード」『信濃毎日新聞』1995年12月14日付朝刊3面。
- 3) 前掲書1.
- 4) 前掲書1、p. 327.
- 5) 『『野沢の火祭り』採用』『信濃毎日新聞』1996年1月17日付朝刊3面。
- 6) 前掲1、p. 139.
- 7) 前掲1、p. 143.
- 8) そして、山ノ内町で行われたパラリンピックアルペンスキー競技の中では、日本体育大学の学生たちがスタッフとして関わり、その名前が山ノ内町の報告書に記載されていることを付記しておく。

(受理日 2022年5月31日)